

亀岡市のこどもの貧困対策に取り組む上での課題と、今後の方向性

アンケート調査等からみられる貧困対策に取り組む上での課題

(1) 子どもの学びについて

生活困難層では、学校の授業以外で勉強をしない割合が高く、学校の授業についての理解度も「いつもわかる」・「だいたいわかる」の割合が低く、「わからないことが多い」や「ほとんどわからない」の割合が高くなっています。また、将来の進学についても「高校まで」の割合が高く、「希望する学校や職業がある」割合が低くなっています。

こどもの学びについては、生活困難層と非生活困難層では、大きな差が見られ、また小学5年生に比べると中学2年生の回答でその差がより大きくなっていることから、早い段階から『学習支援』を行っていくことが重要です。

(2) こどもの生活と健康について

生活困難層では、こどもの朝食や長期休暇中の昼食の欠食、不規則な就寝時刻など、規則正しい生活習慣が身に付いていない割合が非生活困難層と比べて高く、特に小学生でその差が大きくなっています。

また、自分の健康状態をあまりよくないと感じているこどもの割合、むし歯ができた時に歯医者に行かない割合においても差がみられました。

こどもの頃から正しい生活習慣を身につけることで大人になってからの生活習慣に影響することから、学習支援だけでなく、こどもが健やかに成長できるよう、保護者への適切なサポートを行うことが重要です。

(3) こどもの自己肯定感や自己開示について

生活困難層では、非生活困難層に比べて「自分のことが好きだと思う」や「頑張れば、むくわれる」、「自分はだれかの役に立つことができる」の割合が低く、また「不安に感じることはない」の割合が高くなっており、自己肯定感や将来への不安感での差がみられました。

また、保護者のこどもの頃の状況をみると、「学校には相談できる先生がいた」や「両親以外に、話を聞いてくれる大人がいた」など、生活困難層ではこどもの頃に周囲の大人との関わりが少ない傾向がみられました。大人になった現在も、生活困難層では「頼れる人がいない」や「そのことでは人に頼らない」の割合が高くなっており、相談ができていない人が多くみられます。

自己肯定感の低さや将来への不安感から、将来への夢や希望を失ってしまう前に、さまざまな社会的視野を広げるための体験や機会をサポートすることが必要です。

また、支援が必要な時に必要な支援に適切につなげるためには、周囲の大人とのつながりや話ができる環境を整えていく必要があります。

調査結果からの今後の方向性

★教育や進学に対するニーズは、それぞれ個人によって異なるものの、すべてのこどもたちが、それぞれ希望する進学につながるよう、各個人の状況に応じた学習環境の整備や学習機会を提供する支援が求められています。また、そのためには、学習習慣などの日常生活の望ましい過ごし方を身に付けるための支援も必要です。

課題を有することもやその保護者など、誰一人取り残すことのない支援を提供するとともに、継続的に見守り、支えていくことのできる体制づくりの強化に向けて、行政だけでなく、地域や保育・教育機関、民間団体など、市全体で支援を進めていきます。

★保護者自身が心身ともに健康で、心にゆとりのある生活を送ることが、子育てをしていく上では大切であり、こどもにとっても非常に重要です。また、地域社会から孤立して一層困難な状況に陥らないよう、早期に発見し、支援につなげることが必要です。子育てへの不安や悩みを気軽に相談できるよう、居場所づくりを進めるとともに、ライフステージに応じた適切な支援を行います。

★こどもへの学習支援や保護者の相談・サポート、経済的な支援制度があっても、その情報や内容が必要な人に届いていないと意味がないことから、必要な方に必要な支援が確実に届くよう、各種サービスの充実とともに、その情報提供の充実を行います。